

平成23年度第3回高知県教育振興基本計画推進会議の議事概要

1 日 時 平成24年2月22日（水） 10:00～12:00

2 場 所 高知県教育センター分館 1階 大講義室

3 出席者 ○委 員：松永委員、岩塚委員、加藤委員、時久委員、村岡委員、横田委員
森委員

○教育委員：竹島委員

○事務局：中澤教育長、池教育次長、教育委員会事務局各課長、教育センター
所長、教育事務所長、心の教育センター所長、(以上代理含む。)、
その他教育委員会事務局職員

4 概 要

○議題（1）高知県教育振興基本計画中間評価について（重点プランの策定等）

<事務局から資料1～4、参考資料の説明を行う。>

<意見交換>

委 員

重点プラン案前半の分析の部分は、今までの取組の成果が端的に示されている資料となっており、教職員にとっても県民にとっても教育の状況がよく分かるものになっている。今後、重点的に取り組むべきことがはっきりと示されているので、方向性は非常に良いと思う。

特に、児童生徒の状況を示すレーダーチャートは、今の高知県の子どもの状況、課題を明確に示しており、「夢」や「希望」をもって前に進んでいくことが大事だということを、これを使って広げていけると、この資料を目にしたときから思った。

プランの方向性については問題ないが、実際取組を進めるに当たっては、新しい教育課程になり授業時数の確保が難しくなる中で、教員がゆとりを持って子どもに接することができにくくなることや、課外活動や発展的な学習活動の時間が削減されることが心配される。

委 員

レーダーチャートの11項目の状況を見ていると、私たち大人の責任を強く感じる。例えば「あいさつ」の項目について考えると、普段大人が子どもたちにあいさつすることがきちんとできているか疑問に思う。今朝、ゴミ出しのついでに10分程家の前に立って、登校する子どもたちにあいさつを試みた。子どもたちからあいさつすることはないが、思い切ってこちらからあいさつすると、きちんとあいさつを返してくれる。「きまりを守る」など、他の項目についても、これは全部高知県民があまり守れていないことではないかと思う。

教職員だけでなく、広く県民に対し、高知県の子どもたちの実情について、このデータを示し、併せて県民がフォローしていく必要があるというアピールを行ってもらえると、学校は取組を進め

やすくなると思う。学校だけでなく、地域、高知県民全体で底上げを図らないと改善は難しいと思う。土佐人を育てるには、県全体で取り組む必要があることを、このデータを見て痛切に感じたので、ぜひそうした工夫をお願いしたい。

委員

知徳体の徳の部分で、特に子どもたちの心の状況を測る基準がこれまであまりなかったが、このレーダーチャートで示されたデータによって、これまでモヤモヤしていた部分を非常に明確な形で示してもらえたので、学校としても目指すべきものが明確になったのでありがたく思っている。

ところで、私たち教員に課せられた使命は、教育基本法の目標に示された「自主自律の精神」、「公正な判断力」、「生命・自然を尊重する態度」、「郷土の現状と歴史の正しい理解」等をしっかりと育てていくことである。こうした項目を広くカバーできるよう、今回のグラフに追加する項目を検討してみてもどうか。

委員

私も今回のグラフは、今の状況が分かりやすく示されており、課題について考えやすいので高く評価している。グラフを見て最初に感じたことは、本県の子どもたちも全国と同じような育ちをしているということである。というのは本県の子どもたちのグラフも全国平均のグラフも同じような形を示しているからで、いくつかの項目で本県が全国平均を下回っている部分があるが、課題は全国共通であると思う。

一方、秋田県の子どもたちのグラフは、全国平均を大きく上回る項目が多いが、これは、全国学力テストで全国1位という結果をここ数年連続で経験した中で、子どもや保護者だけでなく、県民全体が自信をもっている状況にあるからではないかと思う。配付資料では、秋田、広島の2県のデータが入っているが、調査結果で高知県を下回る状況にある都道府県のデータなども参考に、今後、様々な角度から分析を進めてみてどうか。

私はジョギングを日課としており、朝晩いろいろな人とすれ違う。その度にあいさつをするよう心がけているが、向こうからあいさつをしてくれる方はほとんどいない。子どもたちはその脇を通っているが、声をかける大人はいない。昔は日常的に行われていた子どもへの声かけ、あいさつ行動が地域の中から消えかけている。こうした状況の改善に向けては、学校の教育活動だけでは難しく、大人社会への働きかけが必要であると日頃から感じている。

委員

会社では「大きな声で自分からあいさつ」を徹底しているが、仕事を離れて地域社会にもどったときには、例えば近所の人へのあいさつなど、あまりできていない状況である。確かに地域の中であいさつ行動がなくなってきた。そうした運動を起こす必要があると思う。

委員

今日、事務局から重点プラン案の説明を聞いて、やっと高知県の教育は本丸に入ってきたと感じている。いくら教科の勉強を頑張っても、それをどこで使うのか、何のために使うのか、それ

を使ってどういう人間になるのか、といった意識が欠けていると何にもならないということを感じていたので、プラン案の「心を耕す教育」の内容を見て、高知県の教育が変わってきたことを感じるとともに心強く思っている。

緊急プランの実施により、本県の学校教育はものすごく変化しており、一定素地作りは進んだと思う。今後は発展期となるが、心を耕す教育、中でも道徳教育を推進するうえで、道徳的な実践の場を学校生活や地域社会でどう確保するか、ということが大きな課題として挙げられる。授業で学ぶことと、学んだことの実践という両輪が一致しない限り、効果は上がらないと思う。

また、群れのような状態を集団として育てていく「人間関係づくり」が、特に今の若い教員は苦手であるということも課題である。今後は教科の指導力だけでなく、学級経営力についても高めていくような研修体制の構築が必要になると思う。プラン案では、新規の取組として「学級経営力の向上」が組み込まれているので非常に期待しているところである。

委員

確かに、教室で学んだことの実践の場が必要だと思う。ある小学校では2年生の生活科の授業で、「子どもたちの自主性の育成」と「地域の商店街の活性化」をテーマとする特色ある実践を行っている。地域の人々との交流を通じて、子どもたちの学ぶ意欲も高まっているし、思考力や表現力も高まっている。

子どもたちが自ら学ぶ方向にしっかり導いていかないと、学んだことが本物の力にならないように思う。生活科や総合的な学習の時間、特別活動等を通じて子どもの自主性を育むことを重視してもらいたい。

委員

重点プラン案については、骨子は良いが事業レベルまで見ると相当な分量であるので、もう少し絞っても良いのではないかと思う。重点プランは、文字通り当面重点を置いて取り組むものという位置づけだと思うが、たくさんあると何が重点なのかぼやけてしまい、総花的になると思う。

また、前回の会議で出された意見と重なるが、「自尊感情」という用語には抵抗感がある。個人的には「自己肯定感」という表現の方が適当ではないかと思う。

いずれにせよ、子どもたちの「自尊感情」「自己肯定感」は、日々の学校生活、家庭生活の中で育まれるというよりは傷つけられている場面の方が多いのではないかと思う。最近の大学生を見ると、いわゆる社会人基礎力という部分が非常に弱い。こうした部分を育てるには、大学の4年間だけでは無理で、もっと早い時期から、それぞれの発達段階に応じた意識的な取組を学校・家庭・地域で行う必要があり、そうした意味では、キャリア教育が今後ますます重要になってくると思う。

1月1日の新聞で知事の年頭所感を読んだが、教育改革の内容をまとめた短い文章の中に「キャリア教育」が挙げられているのを見て、知事も県教委も本気だなと感じた。現在、高知県のキャリア教育の指針を作成中であると聞いたが、ぜひ、その指針を通じて学校や地域の実情に応じた高知らしいキャリア教育の方向性を示していただきたい。これから高知県のキャリア教育を進めるに当たって1つお願いしたいことは、企業の方や一般県民など、教育関係以外の方の意見を汲み上げるための意見交換の場を設定してもらいたいということである。

次に、取組の検証については、数値目標の達成状況はもちろんだが、こうした改善の要因は何かという分析が特に重要であると思う。また、高知県の学力の課題については、恐らくほとんどの子どもたちも知っていると思うが、その事についてどんな風に考えているのか、今後どうしていきたいのか、子どもたちの意見を聞きたいと思うし、これまで取り組んできたことに対する教育現場の生の声も聞いてみたい。改善の影にある部分も含めて、リアルな分析を行ってもらえればと思う。

委員

県としての教育の方向性は非常に明確になってきた。あとは私たち学校の管理職がそれをしっかりと受け止めていくことが課題である。今の管理職は明確なゴールラインイメージを描くことが非常に弱い。また、学校では色々な取組を行っているが、それが何につながっているのか、何の目的で行っているのかという整理がきちんとできていない。こうしたことについては、校長会の中でも提言していく必要があるが、県が実施する研修においても、しっかりと管理職に力をつけていけるよう、内容の充実を図ってもらいたい。

委員

私も鍵を握るのは管理職だと思っている。自分は校長になってどんな学校をつくりたいのかというビジョンをしっかりと持ってもらいたいのはもちろん、教育課程の管理をしっかりと行うことができる管理職になってもらいたい。

例えばある教科の授業をみて、改善のポイントを的確に指導できる管理職がどれだけいるだろうか。県外の学校の校内研修をみると、テーマが教科研究でも生徒指導でも、校長自ら講師となって研修を行っている。あらゆる分野に精通した、資質・力量を備えた方が校長になっているのだろう。

委員

以前、「学校現場に PDCA サイクル」という話を聞いて驚いた記憶があるが、現在それが着実に根付いてきていることを実感している。ただ、数値目標が示されると、どうしてもその数値のみを追いかけてしまいがちである。もっと、取組のプロセスを評価して教員の満足度やモチベーションを高めていくことが大事であると思う。

委員

今回、第2回の会議で出された意見について、事務局の考え、対応を取りまとめたものを資料として出してもらっている。こうした形でつなげてもらえると、意見を言ったかいがある。ぜひこれからも続けていただきたい。

委員

体力テストの結果についても、今回のレーダーチャートのような形で示してみてもどうか。この形で見ることによって、課題や対策が考えやすくなるし、心の状況との関連も見出せるかもしれない。幼児や小学生にとって体力は基礎であり、自分の体を動かして何かができるという成功

体験は、その後の成長に重要な役割を果たすものである。

体力の問題は、従来から課題として挙げられながら、あまり改善されず今に至っている。本県の大きな課題であると考えている。

委員

9 ページの学校評価のデータを見ると、本県の学校関係者評価を実施した学校の割合は、平成18年度からは改善されているものの、依然として全国との開きが大きい。なぜ、本県は全国と比較してこれほど低いのか。

事務局

学校関係者評価は、保護者、地域住民などにより構成された委員会などが、学校が行った自己評価の結果について評価を行うものである。自己評価は全ての学校で実施されているが、そこで完結してしまっており、外部の方による評価にまで、一歩踏み込めていないのが一番の原因だと思う。

委員

学校評価のシステムは、最初大学から導入され、ようやく今、小・中・高に入ってきた段階である。自分達が行ってきた取組について、手前味噌でなく、外部の人の意見を活用して客観的な評価を行い、量だけでなく質の向上も図ってほしい。

委員

私のいる市町村では、学校評価が導入された頃から、文科省の指定事業等を通して長い間取り組んできたこともあって、やっと良い形になってきていると思う。緊急プランから重点プランになることで、学校評価の項目とプランの方針が一致するようになり、評価自体もやりやすくなるだろう。

基本計画の10の基本方針の1つ、「高知県の強みを生かし、伸ばす取組を進めよう」に関する取組は、重点プラン案では「読書活動の推進」のみである。確かに学校図書館の整備など、県が非常に力を入れてくれているおかげで、子どもたちの読書活動は充実してきているが、このことだけに縛られることがないように、重点プランに位置づけられた取組だけでなく、教育振興基本計画全体を常に意識して取り組んでいく必要があると思う。